

第5章 中島和子先生を囲んで

目次

第1節 中島和子先生のお話
第2節 中島和子先生のと話し合い

第1節 中島和子先生のお話

甲斐ム 今日、カナダのトロント大学の中島和子先生が日本に滞在していらっしゃって、ご都合をつけていただきました。これから、いつものように一時間ほどお話をさせていただいて、その後で一時間ほど質問をして、ご指導をいただこうと思っております。私も中島先生についてはあまり詳しいことがわからないのですが、一つだけ申しますと、6年前に漢字学習のデモのパソコンのソフトを見せていただいたときに、こんなことを言われたのです。「日本では、漢字の筆順は左利きはどういう配慮がありますか？」と聞かれまして、返事ができなくてショックでした。つまり「日本では」ということは、外国はどうなのかと思ひまして調べてみたけれども、やはりないということです。あれ以来、弱いものへの配慮がどうあるべきかということをお思っております。今日は、我々がいろいろな面を考え直さなければいけないことをお話しただけると、私は期待いたしております。では先生よろしくお祈いします。

カナダの言語教育について

中島 あまり準備ができておりません。こういうことになるのであれば、いろいろと資料を集めてきたのにとお思ひまして残念なのですが。国語教育と外国語教育と、一緒に合わせて言語教育として考えるという考え方は、私は素晴らしいと思うのです。そう考えざるをえない場所にいるものですから、日本の国語教育の先生方はそういうふうには枠を広げて考えなさっていると知って、大変うれしく思っております。そういうことならば、最近、私が住んでいるオンタリオ州で出ました新しい学校教育のカリキュラム、外国語教育といわゆる母国語教育、それを一緒にして一つの分野として扱うことを全面的にしてきましたカリキュラム等について、もう少し詳しくお話しできたら良かったのにと残念に思っています。私はカナダのトロントというところにおります。トロントは、だいたい日系人が2万人。カナダ全体で5万人くらいで、ブラジルと比べると10分の1しかいないところです。カナダは人口の少ないところで、カナダ全体でも、アメリカ側に近いところにしか人が住めない。私がおりますオンタリオ州は、英語圏の経済的、政治的、文化的中心地で、アングロサクソンの最後の砦という感じのところ。州ですから、皆さんは県と結びつけてお考えになっていいのですが、サイズからいいますと、オンタリオ州の中に日本がすっぽり入ってしまいます。オンタリオ州には17しか大学がありませんが、日本には500以上大学がある。さっき英語圏と申しました。ご存じかと思いますが、カナダに行くと、フランス語と英語が公用語だから、どこでも両方聞けるのだと思われるで大変違いま

して、英語圏とフランス語圏とはかなりはっきり分かれています。フランス語を公用語としているのはケベック州で、後はバイリンガルもありますが、だいたい英語を主要言語としている国です。ただ公用語が二つであるために、カナダでいわゆる主流になっていくエリートという人達には、フランス語と英語がとても大事です。例えば首相になりたかったら、両方できなければまず可能性はなし。ということで、フランス語と英語のできる官僚を育てることはとても大事。そのためのバイリンガルまで育てる教育。アメリカでいうバイリンガル教育とちょっと違いますが、一番モデルとして、最近他の国でも使われているのが、French immersion方式、フランス語のimmersion方式による教育。二つの言葉が、学校教育を通してできるようにする試みがなされている国です。ご存じかと思いますが、French immersionは父兄が始めた一つの方式です。学校の先生が考えたのでもないし、大学の先生でもない。父兄がニーズから、子供たちを見ていて将来就職が危ない、二つの言葉が同じようにできないとこの子たちは就職ができないのではと、だから何とかしてほしいと、団体を作りまして学校に働きかけて始めた一つの教育方法です。教育形態といった方がいいと思うのですけれども。最近、皆さんもお聞きになるチャンスがあったと思いますが、アメリカでは、応用してimmersion方式による日本語教育。日本でも加藤学園という、英語教育に応用したものが一つあると聞いております。immersion方式と一言に言っても、実は7種類くらいありまして、どの方式を取るとどのくらいまで行くという結果が出ております。もともとモンリオールの英語圏の父兄が始めた運動ですが、今は全国津々浦々どこへ行っても、全くフランス語と関係ない、例えばブリティッシュコロンビアの州都であるヴィクトリアでさえFrench immersionが行われていて、親の選択肢になっています。英語だけで教育したい、あるいはフランス語と英語の混ざった教育をしたいかを選べるようになってきました。初めはelite bilingualismと言われましてエリートの子だけが入ったのですが、最近は誰でも入れられる。French immersionに行ったから、言葉の発達が遅くなるとか性格が曲がったということは、まずないと言われています。

カナダの教育制度について

もう少し詳しくお話ししたいと思いますその前に、カナダの全体の教育制度が少し違いますので、それをお話ししておいた方がいいと思うのです。まず分け方が違います。こちら側は6・3・3制です。向こうは8・4制、8というのは6+2なのです。ある学校は8年間やっています。それから、ある学校は6年やって2年だけの中学校がある。そこがはっきりしていない。だから8・4と分けた方がいいと思います。secondary educationというと4だけなのですが、primary educationというとその下が入る。その下に幼稚園レベルが二つあります。seniorとjuniorと2年間、幼稚園教育があります。1年にどのくらい勉強しているかと言いますと、小学校は1年間に810時間、日本は何時間でしょう？中学生ですと900時間。夏休みは2ヶ月、春休みに3週間、クリスマスに休みがあって、あまり勉強していないということです。その中でフランス語と英語もやるのですから大変なことです。それからもう一つ大きな違いは、プラスマイナスがあると思うのですが、アメリカと比べて非常に連邦政府が弱い。コーディネーターの役というくらいで、特に教育問題は一切口を出さない。州がそれぞれ文部省を持っています。カナダ全体の語学教育を語ることは非常に難しいのはこのためです。それぞれ事情が違うということもありますが、州のガイドラインを持ち、カリキュラムをやっている。州の文部省がどのくらい力を持っているかという、これもまた疑問で、調べていくと実権は教育局にある。教育局が力を持っているかと思ってよく見るとそうでもなくて、学校の校長である。校長か

と思うとそうでもなくて、結局それぞれの教師次第だという。日本からいきますとどう捉えていいかわからないという悩みがあります。私も子供が1年生にあがったときに、校長先生のところへ行って、教科書とカリキュラムと学習要項のようなものを見せていただきたいと言ったら、きょとんとされまして、結局でてきたのは薄い冊子が一つだけでした。教科書もなければ何もなし。ただ、非常に豊かな教育を受けたと思いますけれども、当たりはずれのある教育でした。理科の嫌いな先生は全く理科をしない。音楽のできる人は非常に豊かな音楽教育をしてくれる。これは個人の経験ですが、全体の特徴として言えることは、中央集権ではない、検定教科書はない、こういうところ。教師の養成ですが、日本と比べて、こんなもので先生になっていいのでしょうかと思われるところがあります。どの科目でもいいのです。B.A.を持っていて、あと1年教員養成の学部に行く。あるいは四年制の大学の中に少し科目を入れて、卒業と同時に教員免許を取る、日本と同じように。疑問に思うのは、教師ができるということと教科がよく教えられるということが、非常に違ったことという感じがして、教員免許は必要条件、その次の、教科がよく教えられるというトレーニングが甘いように思います。最近、中高で教える日本語の先生が足りないのです。中高で教えるためには、それぞれの州の教員免許を持っていなければいけない。日本人が教育学部に入って1年の課程を終えるのは、英語力でもほとんど無理。それから競争率が高いですからなかなか入れない。こういう問題がありますので、どうということを今、現実に行っているかということ、日本の教員免許を認めてもらう運動をしております。実際にオンタリオ州で成功したのですが、他の国で取った教員免許を査定して、教えてもいいという許可を出す。150時間実際に教えて問題がなければ、それを教員免許に書き換えるということになっているようです。その次に、カナダ全体のことを考える上で大事だと思うことは、やはり英語が主要言語なのですが、あるいはフランス語圏でフランス語が主要言語なのですが、カナダは移住者で成り立っている国ですから、移住者の子供たちは家で英語を話す子もいるし話さない子もいる。そういう英語力の弱い、あるいは主要言語能力の弱い子供たちが学校教育の中にどんどん入ってきている。トロント市の場合、だいたい6割までがそういう子供たち。家で英語を話している子の方が少数という現実があります。ですから、普通の教育というよりは、そういう言葉の弱い子供たちをどう受け入れていくかということが、学校教育の中心的な問題だと言えるかと思います。カナダには二つの公用語 **official language** があって、**official culture** はないのである。どこの文化も、移住者が持ち込んだ文化は平等である。それぞれの文化グループが、その文化と言葉を保存することを奨励する。そのために、**multi cultureism directorate** というものを連邦政府の中に作って、そこから援助を皆が受けられる。どういう援助かといいますと、例えば日本人のグループが、日本語を保護したいから土曜学校を開きます、あるいは週末学校を開きますというと、公立の学校の校舎をただで貸してくれる。それから用務員が要りますから、週何時間分の費用を出してくれる。先生は、生徒25人に一人分の給与を出してくれる。こういう非常に実際的な援助を出しています。もちろん不景気になって、だんだんその援助が少なくなりつつある。それでも、研究費や調査費、教材開発費というものはまだあります。今までは、連邦政府の少数言語グループへの援助プラス州の援助だったのです。州の援助は少なくなる方向ですが、まだ完全に切られてはいないという状態です。そういう方針を打ち出したときの基本になるのは、言語資源という考え方です。カナダは天然資源が豊かで、いろいろな国から来た人達の、他言語、他文化というものを、言語資源としてカナダの宝物として保存していきたいということがその裏にありまして、理念の模索にはずいぶんお金を使っていたように思います。いろいろな分野の学者達をオタワという首都に集めて、この政策を浸透させるためにはどういう研究が必要か、どうすることが必要かということを考える。私も研究グループに少し参加しました。非常に刺激的ない

い会だったと思います。結局この問題は、学際的にいろいろな分野の人が関与しなければならないので、日本語教育ならば日本語教育ではとてもできないものでした。だいたいそれが背景として必要なことかと思いますが、実際に言語教育という面から見ると、日本でいう国語教育という確立したものが無いように、先ほどから申しましたように教科書を見たことがないわけなのです。ですけれども、やはり英語圏では英語を教えていく。それはEnglish artという科目になっているのです。ですから私もあまり詳しくはわからない。ただ、息子が学校に行きましたので、日本での文字の習得に比べると、アルファベット、スペリング、英語の単語のレベルの読みができるようになるのに、大変な時間がかかっているように思います。結局、ひらがなというのはものすごく優しい言葉なのだと感じました。一つの音と一つの文字が一緒である。だから4才くらいの幼児がこちらではもう読めます。ところが英語はもう少し時間がかかる。スペリングが難しい。だから入り口のところには時間がかかる。ところが、時間がかかるのですけれど読めるようになってしまうと、だいたい5年生くらいで百科事典が使える。日本語の場合には、入り口は易しい。ひらがなカタカナの段階は易しいけれど、だんだん漢字が入って、大人の百科事典が使えるようになるのは何年くらいでしょうか。漢字の量がかなり増えないと、小学生のための百科事典が使えるかもしれないけれど、かなり上になるわけです。ですから入り口は大変だけれども、少し入るとかなり伸びが早い。だいたい5, 6年生で大人の新聞が読める。大きな単語や難しい単語はわからないけれど、拾い読みができる。そのレベルの伸びがものすごく早い。日本人の、海外出張などで現地校に入った子は、初めのうちはものすごくできるのです。スペリングテストはもう優等生。ところが、上級になっていくとなかなか追いつかなくて、うちの子は少し英語の成績が下がったという結果になっています。その勢いがなかなか追いつかないということが、私の経験を通しての考えです。

フランス語教育 イマージョン方式について

English artについてはあまりお話しできないのですが、さっき少し始めましたが、大事な公用語であるフランス語教育について話して、その次に、移住者の子供たちのためのESLとHeritage languageについてお話ししたいと思います。フランス語教育で、さっきimmersionと申しまして、だいたい私は種類が六つあると言いました。幼稚園から始めるimmersionがあります。この基本的な考え方は、バイリンガルを育てるときには、同時に発達させるものと、それから、一つのことばの基礎を作っておいて、その上にもう一つのことばを乗せていくもの。同時発達型と、継起的発達型という呼び方をしたらいいのでしょうか。両方あると思うのですが、このimmersionの考え方は、二番目の継起的発達です。六つあるものを先に言ってしまうのですが、一つは幼稚園から始める。もう一つは4年生くらいから始める。それから、一日の授業を午前と午後に分けて部分的に使う、partial immersionといいます。それから、中学生から始める。それから、高校生である学科だけする。最後に、六つはいいましたが、もう一つあるのです。これはactivity center方式といって、大事なことは幼稚園から始める部分だと思っています。この場合にどういうことをしているかというと、幼稚園から小学校を卒業するまで8年くらいあるわけです。初めのうちはフランス語を強める。ですから、英語で育ってきた子は英語が第一言語。次に学校に入ったら第二言語の基礎を強める。その基礎の上に両方を使用する。これは外国語教育ではありません。授業を、例えば算数や理科、体操や音楽を何語で教えるかという問題です。ですから教科学習なのです。教科学習の道具としてフランス語を使う。幼稚園の時には、先生はフランス語を使っているのですけれども、子供はどちらでもいい。後ろにたい

ていボランティアのお母さんがいて、英語を話す。バイリンガルとは、本質的には非常に簡単なことで、使い分けのしつけなのです。この immersion 方式では、この先生の顔を見たら何語、と決まっているわけです。あるいは、この教室に来たら何語、と決まっている。こういうしつけをしています。遊ぶところはどちらでもいい。こういうことばの使い方のルールをはっきりさせる。はっきりしていればしているほど子供にはわかりやすい。しつけは厳しくなければ二つは育たない。そういうことが言えますけれども、1年目はどちらでもいい。私が見ていきますと、子供にとって先生との関係がうまくいっていけば、どちらのことばでも大して問題ではない。相手がフランス語を話そうが英語を話そうが、だいたいやることは、歌を歌いましょう、本を読みましょとわかっている。あまり問題ではないということがよくわかります。今度は一年生にあがると、もうはっきりルールとして教室の中ではフランス語。ですから、英語で育っている、家で英語を使っている子が、学校に行ったらフランス語で読み書きを先に習ってしまうのです。フランス語の方が早いのです。フランス語で読み書きを習うと、英語の読み書きはたいして教えなくてもできるようになってしまう。倍教えていたらバイリンガル教育は成り立たないので、一つを教えて二番目も自然に習えるだろうという勘定です。ということは、英語の刺激がなければそうならないのですけれども、だいたい一つ教えると他に移行するわけです。こう言うと皆さんは、日本語と英語ではそうはいかないだろう、こうお思いになると思うのですが、フランス語と英語の方が楽です。あとで少しそのことに触れます。言語観の近似性という問題がありますが、一応フランス語はそうする。幼稚園と1年生のフランス語を聞いていますと、決してよくできるわけではないのです。フランス語が良くできる人と一緒に行ったのでわかるのですけれども、幼稚園と1, 2年生までは非常に発音が良いのだそうです。ところが、3, 4年になると英語的な発音が入ってくる。5, 6年生になると、やはり言いたいことがものすごく出てくる時期ですから、何か欲求不満を感じます。全部言いきれていない。ですから、French immersion という理想的な形ではなくて、いろいろな。結局、ことばは一つの方が簡単で楽なのですが、二つで教育するということはいろいろな問題を抱えながらやっている。1, 2年生くらいまではフランス語を強めて、強まったらだんだん英語を使つての授業を入れていく。そうすると、だいたい小学校5, 6年生までに両方のことばができる。それでも英語のほうが強い。これは、英語のほうが強いということを確認めたうえでしなければいけないのです。家庭で、社会でも使っているから、学校でフランス語を使っても英語の力は揺るがない。こういう状況でやっているわけです。ですから、5, 6年生になると英語はもちろんできる、フランス語も native like である。聞くほうと読む方は native と同じか、native 以上。けれど、表出面、話すとか書く方は落ちる。もっと最近、これは半世紀に入っていて、問題点はいろいろ指摘されているのですが、教室方言ができるそうです。教室の中でだけ通じる方言。それを打ち破るためには、ケベック州に送るとかフランスへ行くとか、直接体験に入らないとなかなか native には近づかない。私は French immersion に行った学生を大学でたくさん知っているわけですが、日本語のクラスに入るとたいていわかります。それほどことばに対する感覚が鋭いです。日本語も早いです。ただ、一つ問題は、直接体験で習いますから教室の中での学習には弱いのです。ですから、日本にポーンと放り込めば非常に早いけれども、教室の中で文法を習えとか、練習をしろと言うと、退屈でしょうがないという特徴があります。今申しあげたものが、early total immersion と言われているもので、一番効果が上がります。いろいろなもの比較されていますから、効果があつてわかるのですけれど。だいたい二つのことばが、一つはネイティブ、一つはネイティブ・ライクになるのに何千時間かかるかと思いませんか？ 授業の中で、教室内の人工培養ですから時間が数えられる。5000時間と言われている、大変な時間です。それに対して、今アメリカではやっている日本

語と英語の immersionはだいたいpartial immersionで、午前中と午後、あるいは科目によって分ける。初めから、一つの基礎ができてからもう一つではなくて、基礎ができる前に両方使ってしまうやり方で、あまり効果が上がらない。できる子はよくできるようになるのですが、ちょっと奥手の子は両方がごしゃごしゃになる、これはしょうがないのです。それから、lateというと中学生ですから、教えますと、聞く、読む方は特に、小学校6年かけてやったよりズッと早く伸びるそうです。やはり母国語の基礎の上にありますから、理解面は早いけれども表出面が遅い、という展開が出てきます。高校になって、一つの科目か二つの科目をフランス語にするということも、大変効果が上がるようです。例えばカナダの歴史なんていうものはフランス語です。それまでにフランス語を習っていますから、急にゼロから始めるわけではない。これはフランス語のimmersion programで、その他に外国語の科目としてのフランス語教育もあります。それはcore programと呼ばれていました。私の息子の場合にはcore programでしたから、幼稚園からあります。毎日20分フランス語をやって、1年生から40分。フランス語の先生はすごくこぼしていました。「40分というと、子供を集めて座らせてだけで終わってしまう、何もできない」と言っていました。それを13年、オンタリオ州は今12年になりましたが、毎日あるのです、40分続けていくと、かなりの力になると思います。そのFrench immersionの校長先生に会って、「どういう子供たちを受け入れるのですか」と言ったら、やはり、「第一言語で成功した子」ということは、母国語である英語が良く、基礎がしっかりしている子という意味です。それから、「家庭で英語の刺激が受けられる子」と言っていました。French immersionが成功している理由は、二つのことばを、家庭では英語、学校ではフランス語を使うという使い分けをしても、アイデンティティーが揺るがない、英語の文化の担い手として育っていくということ。それから、フランス語で習ったことを英語にトランスファーできる刺激がある、ということが言えるのではないかと思います。まだいろいろ問題があると思いますけれども、ざっとお話をさせていただきます。

ESLについて

その次に、移住者の子供たちの話をしたいと思います。日本でも最近は外国人子弟の受け入れて、やっと問題になってきて、私はハラハラして見えています。というのは、カナダではもう30年この問題と戦っていますから、非常に大変な問題だということはわかります。ヨーロッパでも、2000年には学齢期の子供の3分の1は外国人就労者の子供になるということで、世界的な問題だと思います。これは個人の問題ではなくて、社会政策であるとか、それこそ文部省がどういう言語政策をとるかという、かなりレベルの高い根本的な政策の問題です。「結局、移住先の言語政策と、ホスト・カントリーという出てきた国の言語政策によってこの運命が決まる」という社会言語学者がいますけれども、かなり大きな問題です。もちろんカナダでは、英語のできない子供が学校に入ってきた時どうしたかという、皆さんもご存じのESLというものをまず作りました。ESLは、私の調べたところでは、日本人の子供の場合、だいたい9ヶ月くらいお世話になります。アメリカの場合には、2年くらいお世話になるというケースもあるようですが。英語力がどういうふうに関連するか、英語力と日本語力の調査をしてみたのですが、海外市場を使って関係を調査した場合、何時間ESLを受けたかということが優位差になってでてきます。ある意味でESLは非常に大事な窓口ではあるけれども、そこで蓄えられた語学力は大したことはない。ただ、適応をスムーズにするという意味では非常に大事である。こうすることで、ESLに5、6年もおいておくわけにはいきませんので、やはり、日本の学校で日本語を教えるという日本語教室を作った場合も、なるべく早くホームルームに返してやることを

考えます。分けておいて5, 6年日本語を教えるということは考えられない。ただ、英語が追いつくには、私は日本人の子を使って調べたのですけれども、他でも言われているように、会話力では2年くらい。その会話力といってもいろいろと面があって、寄与している要因が違いますが、個人差はあるけれども一応2年くらい。ところが、教科学習で人と競争ができるところまで行くには、日本人の子は4年でした。やはりこれはelite minorityと言ったたらいいのでしょうか。けれども、トロント全体の移住者子弟の大きな調査があるのですが、これでは学習に追いついていくのに5年から7年。それから、カリフォルニアのESLの研究では、追いついていくのに2年から5年の個人差があるといっていますが、だいたい同じような結果がでています。つまり、日常の会話力は早いけれども、本当に学年レベルになるには大変な時間がかかるということなのです。その間、取り出し授業はできないし、子供は自力でそこまで行くわけですがけれども、大変時間がかかっているということがわかっています。それで、ESLですが、私も専門ではないのであまり良くわからないのですが、カナダの場合には、いくつかの種類が作ってあって教師が選ぶようになっていきます。良く発達したところですが、まずノースヨーク教育局というところが一番移住者の子供が多い。そこが非常に進歩的なところなのです。まず、子供の母国語の力の測定をします。ベトナムから来た子はベトナム語がどのくらいできるか、という測定をします。その結果に基づいて、それから性格を見て、この子にはこういうESLがいいのではないかと。こういう判断をするようです。どういう種類があるかということ、できない子供を集めてある学校があるのです。magnet schoolと言いますが、英語をできない子供たちだけを集めて教育をする。そこで、その子供たちのために、英語だけではなくて体操も音楽もある。皆できない子供ですから、あまり恥ずかしくない。ただ、できる子はそういうところに入れると英語の伸びが非常に遅いのです。周りは皆、英語のできない人達ですから、悪い発音が身に付くとか、マイナス面がないわけではない。けれども、思春期の子供にはその方がいい。英語が非常にできる子と一緒に勉強させると、それだけで負担が大きいのです。ことばでコミュニケーションができないとバカだと思われる。という子供たちには非常によい。もちろん、取り出し授業というものが一番普通の形で、人数が少ないところはそれ以外に考えられない。ですから、ESLの先生が一人いて、あらゆる学年の子供たちを一つの教室で、マルチレベルの授業をやります。四つあるのですけれども、はっきり思い出せない。アメリカではこのESLの段階を、バイリンガル教育bilingual educationと呼んでいますが、これは、二つのことばを同じように育てるのではなくて、英語ができるようになるまで子供の母国語を使う、こういう目的の違ったバイリンガル教育だと思います。早くからカナダでは、学者がこの問題を研究テーマとしてとりあげて、Cumminsという専門家がいます。こういう子供たちはESLだけでは足りないのだとか、母国語保持をきちんとしないと、せっかく二つのことばに触れて育てているのに、両方の言語集団に片足ずつ足をつっこんでいるのに、結局、一言語になって学校のことばが自分のprimary languageになっている。親のことばは親のことばとして捨てていく。ですから、ある時期で日本人の子にもそういうことがあります。現地校に入って2年くらいすると、親子の仲がいいときはいいのですが、けんかでも始まると自分はカナダ人だと言い張る。そして、親が日本語で話しかけても絶対日本語を使わない、英語でしか答えない、日本にも帰らないというようなことがでてきます。結局、母国語の置換というのですか。今まで母国語だったものがそこで喪失が起って、そして、新しい学校友達、学校で習うことばが自分の強いことばになっていく。この転換があった場合に、二つがなかなか育たない。よほど親が努力しないと育たなくて、結局、一言語の子供になっていく、社会の主要言語が自分のことばになっていく。それでいいのではないかと親がたくさんいるのです。日本人はわりとそこはおおらかで、自分の子が英語でしか答えなくてもあまり問題

にならないのです。ある他の民族はそこで大変な騒ぎになって、非常に母国語保持に熱心なところがありますけれども。とにかく、そこでその社会の主要言語が自分のことばになる。それは表面的にはいいようなのですが、実際は非常に根の浅いもので、いろいろな問題があります。一つは **language loss** というものがあります。新しいことばを習得するのはプラスの経験ですが、今まで持っていたことばを忘れてしまう。それに伴う心理的な問題、自信の喪失とか、いろいろなものがあります。それから、文化によっては、特にアメリカ側のメキシコ系の人達は家族を非常に大事にする。家族の間でスペイン語を話しているときに、スペイン語が弱くなったためにそこに参加しないと、自分達に対して反感を持っていることになる。ですから、スペイン語を話すグループの中にも入れてもらえない。そこにいと非常な違和感を感じる。かといって、英語を話すグループからは、「おまえは違うグループだ」と言われる。どちらにいても違和感を感じる、例の、文化の狭間の問題という、いろいろな問題を抱えた、主要言語を第一の言語とするグループがでてくるわけです。そこで、それをどうするかということで、連邦政府の **multi cultureism** の政策のおかげで、いろいろな言語グループが母国語保持クラスを開いているのです。週末に60カ国くらいのクラスが開かれているのです。だんだん政府の補助が少なくなって、今年は37だと聞いていますけれども、種類としては60何種類があります。やり方は州によって違いますが、移住者が非常に多いのは三つ、モンリオールとトロントとバンクーバーです。オンタリオ州は、**Heritage language class** と言っていますけれども、親の文化を継承する、継承語教育が大変さかんところなのですが、おかしなことに州の文部省は、二カ国語でしか教えてはいけない、公用語でしか教えてはいけないという教育法があります。ですから、フランス語か英語で教えることはできるけれども、少数言語で教えるてはいけないということがありまして、公立学校でなかなか少数言語が使えない。だから、週末や放課後になっています。私立学校では自由ですから、トロントにも三カ国語の教育をしているところがあります。これは、フランス語と英語と日本語です。午前10時までは英語で、お昼過ぎまでフランス語、そのあと日本語という **trilingual school** があります。他の州に行きますと、例えばアルバータ州などでは、そんな変な教育法がないので、中国語やドイツ語やウクライナ語を、学校の勉強の道具として使っている母国語保持学校があります。私はいろいろなものを見に行きましたけれども、一つは、英語だけで教育を受けている子供たちと、英語とフランス語で受けている、いわゆる **French immersion** の子供たちと、ウクライナ語と英語とフランス語で教育を受けている子供たち、三つのグループが同じ校舎の中で勉強をしているものがあって、大変効果を上げている。校長先生に、「どうしてそういうことをしているのか」と聞きましたら、面白いと一つ。それから、自分はウクライナ系である。もう一つは、子供が少なくなって学校が閉鎖される、もしこういう新しいことでもしなければ、例えば復習教育をさせられるとか何かがあると、非常に現実的な理由でそうなる。校長先生も、もしウクライナ語と英語の **program** をするのでしたら、ウクライナ語を最低4週間勉強しなければならない。子供が何かあったときに助けられるように、ということでした。ウクライナ語と中国語はうまくいっていましたが、アラビア語はあまりうまくいかない。それは親の、両方できるようになってほしいという希望が全くないから、そういう親の姿勢、期待が子供にそのまま伝わりますので、**motivation** がうまくいきませんでした。こういうところでは、両方ことばが得意な子が出てくる可能性があります。アルバータ州のいくつかのバイリンガル教育の話をしたのですが、この州は、幼稚園レベルをある言語コミュニティがうまくやったら、そのあと12年間保証するという方針なのです。一旦始めたらやめない。二つのことばを育てるのには時間がかかりますから、やはり途中で出されてしまうのが一番いけないのです。不景気な時代に、いつまでこの大変良い政策が続くか心配ですが、非常に良いことだと思いました。そういう意味

で、Heritage languageと言われているものにもいろいろ形があるわけです。ブリティッシュコロンビア州は面白いことに、移住者が入り口ですから一番たくさんいるのですが、Heritage languageという形ではなくて、公立学校の小学校の中に外国語教育を、フランス語以外のものを入れようという動きになっていまして、小学校4年生から必ず、日本語か中国語かクンチャビなどを勉強する。今、人数が増えている感じです。小学校レベルの外国語教育、しかも少数言語の教育に非常に熱心な州なのです。この9月から始まると思うのですが、非常に楽しみな試みです。そういうHeritage languageというものは、もうこれで20年たっています。トロントにも、Heritage languageをしている学校が、週末日本語学校が7つもありまして、そこでは少し対象とする子供が違います。海外子女用の補習校は別として、日系人と一言で言われているのです。戦後の技術移住者の子供、ということは親がまだ日本語を話す家庭の子供たちと、戦前からいる日系人の子供、これは三世四世ですから親が日本語を話せない子供たち。同じ日系人といっても、二世語教育と三世四世語教育とは内容が違ってきます。いろいろな学校でそれが選べるようになっていまして。一番しっかりやらなくてはいけないのが二世語教育で、親が違ふことばを使っていて、しかも学校で英語を使うという、この二つのことばにグループができます。親のことばが少数言語である場合は、いろいろマイナス面がでてきます。葛藤もあります。置換という問題もありますし、そこをしっかりとやらなくてはならないという認識はみんなあるようです。もう20年くらいやっていますから、カリキュラムの作成であるとか、だいたいどういう時期が一番危機があるか、言葉を失うチャンスはいくらでもあるわけで、それをなんとか差し止めたい。大海に洗われる小石のように守られなければならないということ、ことばが消えてしまうのを何とか止めなければならないというものが、このHeritage languageです。それをどうしたらいいかというノウハウが大きな問題で、だいたい固まってきている感じがします。たいていそこで国語の教科書を使うわけです。国語の教科書は、もちろん日本人の子供に作ったものですから、合わないのはわかっているわけです。それでは日本語教育の教科書がいいかということ、これはまた合わないのです。外国語ではないのです。家庭で育てていることば、home basedですから、外国語教育とはまた違ったレベルです。その人達のために作った教科書というものはまだないのです。日本の文化を伝えたいのですから、国語の教科書を持つてくことはそんなにおかしいことではない。ただ、ことばのレベルで合わない。どういう使い方を現実にするかということ、だいたい1年に2冊あります。それを1年ずつ使っていくと、小学校6年生で小学校4年までです。上級に行けば行くほど問題は増えてくるわけですが、知的なレベルと実際に読む教材のレベルが非常に違いすぎる、こういう問題があります。そういう学校に10年間いった子供に、私が日本語と英語の力の調査をしたのですけれども、日本語に関していいですと、小学校4年レベルです。だいたい教科書どおりだというわけではないのですけれども、小学校4年くらいまでしかいっていないのです。ということは、抽象的な表現が多いのです。ですから、漢熟語が非常に弱い。その壁が越せないと言ったらいいのかもしれませんが。そこで、英語で書き慣れている子供たちにどうやって漢字を教えるかということが、この学校の先生方の問題です。英語の表記法や英語の考え方に日本語を加えていかなければならない、この二つの異なる環境で。外国語として日本語を勉強していきたい大学の1年生の力と、そういう子供たちとを比べてみると、水と油のように合いません。私の問題は大学にそういう学生を受け入れなければならないのです。受け入れるときに、どこでどうやって受け入れるかという問題があるのです。教室で習う外国語としての日本語と、家庭をベースにしている子供たちとはなかなか質が違う。それで私達は、漢字教育も問題なのですが、それ以上に会話教育。子供たちの一番強いところは親と会話をする会話力なのです。会話と言っても、外国語としての会話力とは非常に違うのです。あるケースは、聞くことは両方できるけれ

ども、話すのは一つのことばというものもありますし、両方のことばが混ざってしまって、ちょっと言葉に詰まるともう一つのことばにすっと動くというものもあります。それから、何とか日本語で会話ができても、この子供たちは非常にコミュニケーションが、技術が優れているのです。わからないことがあってもたいてい、わからないと言わない。聞き流す訓練ができてしまうのです。毎日の生活ですから、わからないところもわからないと言っている余裕が無いことが多いのですけれども、非常に雑な聴解力。話す方も、きちんと文章を作らなくても通じてしまいます、家庭の中ですから、短略的になってしまう。ですから、文章がなかなかまとまらないということがある。外国語教育用のテストをしたのでは非常に合わないというので、こういう子供たちの会話力テストを開発して使っています。その子供たちはやはり会話力が一番の砦で強いのですから、会話力を英語と日本語で両方、査定してあげて、その総和としてみる必要がある。それをもとにして他の力も伸ばすことを考えなければいけないのではないかと考えています。今、小学校4年と言いましたけれども、バイリンガルの力の発達の過程を見てみます。普通、ことばの発達というと音声言語と文字言語があって、そして理解面表出面で聞く話す読む書く、こう分けます。この分け方で考えていくと、なかなか問題点が見つめないというので、違う分け方です。二つの軸を考えて、一つは、ことばだけで表現しなくてもいろいろな助けがある。例えば会話というと、表情もジェスチャーも場面もありますから、ことばで全部表現しなくてもわかりあえる。それから、どのくらい頭を使わなければならないか、非常に思考力を必要とする言語活動と、そうでない言語活動があります。それがもう一つの軸です。例えば、いつも最寄りの店で買い物をすると、あまり何も考えなくてもできますし、その場の状況でことばを使わなくてもコミュニケーションする。それをAとしますと、今度その反対の極には、全部ことばで説明しなければならなくて、しかも頭を使う。例えば、皆の前で何か調べて発表するとか、レポートを書くとき。これは非常に頭を使うし、言語以外頼るものが無い。ですからこれはacademic languageという言い方をして、こちらはcommunicative languageという、両面があるのです。二つの言語に触れていく、育てていく場合には、communicative languageは2年くらいなのだけれども、academic languageは大変な時間がかかるみたいです。もう一つは、ことばとことばがどういう関係か、第一言語と第二言語が関係があるのか無いのかということなのです。結論からいうと、academic languageは非常に関係があるけれどもcommunicative languageはacademic languageほど関係がない。こういう結果になっていると思います。どういうことかと言いますと、二つのことばの力を持っている子供たちの頭のなかを見ることはできないけれども、仮説ですが、頭のなかにはことばの袋が二つあるという考え方があると思うのです。ですから、海外に出た日本人の子供が一生懸命学校に行って英語を覚えようとしているときに、日本語の勉強をしなさいと言うことはかわいそうである。今は日本語を一生懸命発達させていて、そんなに頭の中は許容量は無いのだから、日本語の力はどうしても、両方は無理なのであると考えた時代がある。これは分離説なのです。これで考えるとバイリンガル教育は成り立たないのです、2倍の経験はさせられませんか。それに対して、二つの言語は全く別ではなくて、どこかで通じているのではないか。いろいろなデータが出ていると思うのですが、私達が、教育大学にいる先生方と一つの調査をしました。先ほどちょっと触れました、海外子女、全員で91名を1981年と1986年と2回調査したのです。1981年には二つのグループを作りまして、小学校2、3年と、小学校5、6年。それから、もう一つは日本人グループとベトナム人グループを作りまして、日本人グループとは非常に教育環境の良い子供たち。それに対してベトナム人グループは、そのころベトナム難民の子供が入ってきた時代で、当時最低のグループ。これを対比させまして、両方のことばのテストをします。会話力テスト、それから読解力テストをやったのです。英語の方はまだ習い初めですか

らピンからキリまでいるので、もっといろいろなテストをしました。文章反復テストや反対語テストで、会話テストと読解力テストだけ両方やりました。第2回目には、作文でどのくらい関係があるのかということで、幼児から中学生まで広げて、読解力テストも加えて、作文という力で二つのことばの関係はどうかということを調べてみました。結果は第1回の調査では、仮説としては、日本語と英語は構造的に非常に違う。思考も違うけれども、**academic language**に関しては、日本語のできる子は英語のその面の発達も早いではないか、到達度がより高いのではないかという仮説だったのです。実際に調べてみると、年長者と年少組とあったのですが、年長組があらゆる面で有利で、年少組が今の発達でプラスだった面は発音だけでした。仮説としては、やはり年少組のコミュニケーションの方が早いのではないかと思ったのですけれども、そうではなかった。結局、第一言語の基礎がある方が、ことばのあらゆる面、発音以外は全部プラスと出てきます。読解力に関しては、50%の相関関係でした。他の人の研究ですが、ロシア語と英語ですと、52%という数字がでています。ヘブル語と英語ですと、これは日本語よりも相関が低くて48%。フランス語と英語の場合、いろいろな調査がありますが、それをまとめてみるとだいたい80%。日本語と韓国語だったら多分90%になるのではないかと。ですから、ベトナム語の場合も同じような結果がでましたけれど、そういう相関関係がある。それから、英語力にはいくつかの面があると申しましたけれども、だいたい三つの面に分かれまして、因子分析をしてみますと、一つの因子は会話力と呼んでおりまして、もう一つは今言っている**academic language**です。**academic language**とはいったい何かということは大変問題になるのですが、私どもとしては一応、読解力を選んでいいる。それ以外のものもあると思うのですが、代表として選んでいる。もう一つは正確度ということがあります。それにどういう要因が寄与しているかということ調べてみると、簡単に言いますと、会話力には性格でした。消極的な子供と積極的な子供、内向的であるか外向的であるか、親に判断がある。それとの関連を調べたのですけれども、やはり会話力は、外向的な子で、その場で例えば人に話しかける力があるか、そういう積極性も非常に大事。もちろん滞在年数もあります。それから学力用語に関しては、国語の読解力が一番大事なのです。年令とその二つがある。正確度は滞在年数でやはり長い。子供の学習ですから、教室の中で文法を教えてもらいませぬから、自分で発見学習をするわけです。触れていって、だんだん自分で文法的なものを獲得して行くわけですから。その中で、滞在年数が長いにも関わらず、なかなか正確度がつかない一つのグループが出てきてまして、調べてみるとやはり日本人がかたまっている。仲間の変な英語が身に付いているということでしょうか、そんなものが見えました。そういう結果がでてきました。ですから、非常に一つのことばが次のことばの学習の基礎になるということは、日本語と英語でもある程度言えると思います。そういう子供たちが、親のことばを家で使う、実際は日本でもそうだろうと思うのですが、外国人子弟が来て、学校の先生が熱心なあまりに、親に「家でも日本語を使ってください、そうすれば日本語が早く身につきます」という先生がいるだろうと思うのです。それからまた親も、「これから日本に永住するのであったら、もう母国語であるベトナム語はいりませぬ。早く日本語ができるようになってくれればいいのです」と言うだろうと思うのです。そここのころの常識ができていないと思うのです。カナダではそこが問題です。**Heritage language program**に行った子供と行かない子供、それから行った子供はどうなったか、行っている子供と行かない子供とどこが違うのか、というようなデータがいくつかでていて、家でその言葉を使い続けた子供の方が、適応が早いし英語の学校でも勉強が良くできるという結果が、カリフォルニアでもでています。カナダでも、**Heritage language**を保持している方が、英語力の学習が早い、それから第三言語の学習が早いとでています。ただ、日本人を対象にしたのではなく、最近の一番新しい研究成果では、ことばの保持とアイデンティティー。こ

れは、大学生になった日系人の **interview test**, **questioning test** をしまして、語学力と、アイデンティティーの意識と、**multi cultureism** 多言語政策に対する理解度を調べる。二つの言語の関係は、だいたい四つの形になるのです。両方できる子供、両方できない子供。両方できない子供はどうしてもできるのです。それから、カナダにいながら日本語の方が強い子もでてきました。カナダにいて英語の強い子ももちろんいる。この四つのグループに分かれる。英語で言いますと、一番目は **additive**、一つの言語にもう一つ加わっている。その次は **retractive**、その次が **subtractive** といって、一番下が **semilingual** になるわけです。**semilingual** ということばは私は大嫌いですので、**double limited** と言った方がいいと思うのですが。そういうものとアイデンティティーの意識がある程度関係がある。両方できる子供は、どちらのグループに入っても自分はやっていけるという自信がある。次の子供は、日本のグループではいいけれど英語では少し距離感があるという感じ。その次になると自信がない。**double limited** の方はあまりはっきりしない。ネガティブなものというよりも、あまりはっきりしないという感じがあって、これはまだ研究の途上ですので結論がでたわけではない。

今後の課題について

これからの課題としては非常に、今後日本が国際化していく上では大切だと思うのですが、私が思っているいくつかの課題は、両方弱い子供たちをどうしたらよいか、その子供たちの二つ混ざった言語教育はどうあるべきか、その子供たちを強める教育の方法論はないか。経験を通していくつか方法論を考えていますけれども、それをもう少し実証的にやってみる必要があるということ。それから、ことばの習得についてはずいぶん研究がありますが、ことばを失うということの教育的な意味、マイナスの意味について、あまり知識がない。そのくらいで、私が面白いと思っていることを話してしまいました。

第2節 中島和子先生との話し合い

甲斐ム ありがとうございます。それでは、中島先生からいろいろとお話を聞かせていた抱きましたので、ここを尋ねたいところを、質問していただきたいと思います。

日本における **immersion program** の実現

寺井 **immersion program** について、例えば、日本の学校で英語を入れて、加藤学園などはやっておりますけれども、そういうものは実際にやるようになるのかどうか、やるようになるとすればどういった問題点があるのかということ、先生のご経験から推測的に教えていただければと思うのです。かなり今は条件が違うと思うのですけれども。

中島 まず、到達目標を両方同じようにできる、文化的にもそのグループの担い手になると、これは無理です。こういう目標を立ててはいけないと思うのですが。その次の、私は L1 ドミナント型といいますが、母国語文化は身につけるけれど、もう一つの力は文化を抜きにしたコミュニケーションのツールとしての英語力、と目標設定をすれば、日本という社会環境では育つと思います。日

本語が非常に強い国ですから、日本語は学校で使わなくても充分育つ可能性がある。漢字教育は少し問題に残ると思いますけれども、そういう下地がある。それプラス、英語が大事だということが非常に浸透していると思うのです。親も大事だと思うし、子どもも大事だと思うし、学校の先生も大事だと思う。子供に納得がいくわけですが、学校で使っている。だから、環境としてはL1ドミナント型のバイリンガルを育てることができる。この場合の鍵になる、英語の基礎をつけるということは、割合に簡単にできると思うのですが、そのあと、こんなにカリキュラムがぎっしりつまっている日本の国語教育を、どこを減らしてどうやって入れていくかという問題になって、国語教育のエッセンスというものがでてくると思います。それだけでも足りない。直接体験をどこかで入れる必要があります。学校の中の純粹培養は危険ですから、ときどき外国人との直接体験をどこかで入れる工夫をすれば大丈夫だと思います。

寺井 親の英語に対する期待度は高いとしても、カナダにおけるような、フランス語ができないとある地位につけないという状況はないのではないかと思います、その点ではいかがでしょうか。ようするに、英語ができないと日本で生活できないという現状はなくて、カナダにおけるような状況までに日本の学校、家族がなるのかどうか。

中島 そういう状況はないけれども、それは信念で補うよりないのではないかと。というのは、二つのことばを三つのことばに、とは豊かになることです。日本語ができなくなったらおしまいですから、そこだけきちんとしなければいけない。ただ、カリキュラムでがんじがらめになっている日本の教育の中で、それができるかというのはわかりません。カナダの場合は、カリキュラムに流動性があるから、あまり感じない。でも日本の場合には、もう少し細かく教科でなっていますから、そこを全部同じようにしないと、補習校のようにみんなが1,000時間以上使っているところを300時間くらいで全部やるということになると、子供の負担になる。

immersion immersion 他教科との関連

寺井 それは他の教科に、immersion programを設定することについて、もう少し内容的に。

中島 内容的に、算数を英語でどうやってカバーするかという問題です。

寺井 そうです。理科も社会科も。

中島 教科学習と言語教育を合わせて考えるという考え方、アプローチです。

寺井 そうすると、immersion programを入れるときには、小学校でいう教科を越えて内容の取捨選択をしないと、成功しないということですか？

中島 そうです。アメリカのimmersion programを見てみますと、成功しているところは、教科別のカリキュラムというよりは、教科別でやっているところはあるのです。算数と理科だけ日本語。これは非常に危険で、接触することばにあまりにも限界がありすぎる。教室内で使われる先生の日本語にあまりにも限界がありすぎる。そのために、ことばは健常児に育たない、不具を育てている感じがするのですが。そういう分け方ではなくて、今アメリカで流行っているのですけれど、テーマで、ある例えば公害というトピックを選んだとする、全部の教科でそのテーマを扱うところで、教科別に割るのではなくてあらゆる教科の中で、ことばに頼らないでも教えられる部分、具象性のあるところだけをimmersionの先生が引き受けて、概念的にことばで説明しなければわからないところを英語の先生が引き受ける。ものすごく話し合いに時間がかかるそうですけれど、そういう分け方をしているところの子供たちが一番生き生きと見えたと、理屈にもあっているように思います。

そうすると、ことばと発達、初めからacademic languageは育たないのです。やはり、コミュニケーションの力をもとにして抽象的なところまで行くのですから、その段階をふまないといけない。ですから違った教科別のアプローチがあるということです。

複数の言語習得のプラス面

高木　もしかしたらお話しされていたかもしれないけれども、最後に、母語だけではなくて他の言語でということ、豊かになることとおっしゃいましたけれど、実際にご経験を通して、英語なら英語、フランス語ならフランス語、そういう一言語のまま育った子供と、二言語なりもっとことばを身につけて入った子供たちと、比較的どういう面で変わってきたのか。もし日本で英語教育を小学校でもし始めるとしたら、単に将来の実利性のことだけで効果があるのか、それとも人間性の豊かさにつながっていくのか、先生はどうお考えになっていらっしゃるのでしょうか？

中島　教室の中でだけ教えることと自然接触で習得していくことは少し違うと思うのですが、自然習得に関してどういう点でプラスになるかということ、実証的な研究がある程度なされていて、私が特に面白いと思うのは、反人種偏見につながるということなのです。例えば、French immersionに行っている子供と英語だけの子供と比べて、お人形をフランス系の人形と英語系の人形とおいて、年令を5歳、というふうにいくつかグループを作ってやった研究です。「どちらの人形が好きか？」これは5歳児用の質問ですけど、そういう、ことばとそのことばを話す人に対する近親感を調べたものを見ますと、結局、French immersion、英語とフランス語と両方に行っている子供の方が、ことばと関係なく自分の好きな人を選ぶ。英語しかやっていない子供は、英語を話す子供に対しての近親感は育っているけれども、フランス語を話す人達には一線を画す。これは、French immersionの研究だけではなくて、他にインディアンの子供の調査でも、ことばの違いはあるものだ、ことば以上の何かを見ようとするということが、実証的に研究されていると思います。それから、role playingの研究でも、結局ことばが一つ以上の子供は、相手がどのことばを話すかによって自分のことばを選んでいく。ですから相手に対する配慮や、そのグループではどういう言葉が一番通じるかという、言語環境に対する柔軟さが早く育つということも言われていて、そういうことは私は大変プラスだと思います。

第二言語の母語に対する影響

高木　その第二言語を習得していく過程で、第一言語の学習に跳ね返ってくるもの、いろいろな影響があると思いますけれども、そういう点は具体的にどういうことが考えられるのでしょうか？例えば、日本で英語の学習をするといった場合、それが日本語の母語の習得のために、何か影響力を持つのかどうかということはどうでしょうか？

中島　そうですね。二つのことばで学習した場合のおつりというか、プラス面というものは、だいぶ議論的です。結論から言うと、おつりはあるけれども大したことはないのではないかなと思うのですが。最近のものでは、Hakutaという人が大議論をしています。でもその議論は5歳から7歳に関してのものなので、もう少し長く見ないといけないと思うのですが。今まで言われていることは随分あるのです。例えば、ことばを二つ習うということは、ことばそのものにも習う、L1とL2とLというものと、この三つの習得をするのである。だから、ことばが一つ以上の人達は、

英語で言うとmeta-linguistic awarenessというのですけれども、言語そのものについての理解が深まる。それは昔から言われていることなのです。それから、Lambertは、クリップのようなものを見せて、「これが何に使えるだろうか？」というようなアイデアを出させる。バイリンガルの子供の方が、アイデアにバラエティがあるし非常に創造的である。これは心理的な研究ですけれども、バイリンガルの方が創造性と、思考の柔軟性があるというようなことを言っているのです。これは、実験でそういう結果が出たとしても本当に言語教育に深めるほどのプラスかどうかということは、私はわかりませんが、でもプラス面はそういう形でたくさん出されているのです。でも、1960年以前はこれが逆です。精神錯乱や情緒不安定や学業不振と結びつける。これはテストの方法が悪いという。ことばのできない人に、ことばによる知能テストをしたら、できないに決まっているのです。そういう考慮なしにテストをして、その結果からネガティブな結果を結論として出すということが非常に多い。でも、ことばを二つ習ったからといって、頭が良くなるわけではないことは確かだと思うのです。あまり優位さができるようなものは、なかなか出にくいだろうと思うのですけれども、ただ私が一番心配するのは、マイナス面があるということです。二つのことばの狭間に育つ子供は、よほど周囲の人が両方伸ばすように工夫してあげないと、マイナス面になる。これが、私が一番思うことです。

バイリンガル教育に対抗するEnglish Onlyという動き

太田垣 私は、今年の3月まで一年半、アメリカのカリフォルニアに滞在したのですけれども、そこでバイリンガル教育に関していくつか講義を受けたのですが、その中で何度も繰り返してピックアップして話題になったことに、バイリンガル教育に対抗するものとして、1980年の後半からEnglish onlyという動きが出てきて、その二つの対立が授業の中でも非常に大きな問題になったのです。カナダの現状はいかがなのでしょう？

中島 全くそれはありません。アメリカは、ことばの問題というものは政治の問題なのです。初めから、bilingual educationが出てくるときから政治的な問題なのです。今、熱病にかかったように、English onlyという英語だけで行くべきか、英語以外のことばも許容すべきかという大論争で、バカみたいだと私は思うのですけれども、いろいろな州が「我々の公用語は英語である」と発表、宣言したりしているのです。最近出たCrawfordの『移民社会アメリカの言語事情』という本に、非常によく書いてあります。ですけれども、あれはアメリカの問題です。というのはやはり、日本では強制ということばを使っているけれども、アメリカの今の現実には言語事情がかなり緊迫していて、強制ということばを使っていられない状況があると思うのです。その主流の人達が非常に脅威を感じるから、ああいう動きが出るのだと思うのです。日本は日本語が強いから、まだ強制といっていられるのだと思うのです。

カナダの移民政策

太田垣 カナダでは、移民政策そのものはどのくらいの数ですか？

中島 移民政策はquarterを作っていますけれども、非常に緩やかで、移民で入って生きていくことができない場合には、6ヶ月間、政府が生活費を出して英語を習わせるということをいまだにやっています。移住者が非常にのびのびとしています。ポルトガル系やイタリア系がトロントは多いの

ですけれども、ポルトガルに行って見るポルトガル人より、カナダにいるポルトガルの方がずっと
とのびのびと、生き生きと生きている感じがします。アメリカはやはりEnglish onlyの国なのです。
そのプレッシャーがあります。カナダはそれが無いのです。ですから、どの言語グループ、どの文
化グループも、自分達の文化を保存することに何のプレッシャーも感じない。人と人との間に距離
感があります。

上谷 immersion方式の中でも6つ挙げられて、最後の6つ目がactivity centerとおっしゃったと
思うのですが、先程もしかしてあまりそれをお話したださらなかったかと思います。例えば今の移
民政策でという話で、親の場合、大人の場合に対してのものが、activity centerなのでしょうか？

中島 私は今、全部子供の話をしております。

上谷 5段階目が高校生のある学科においてというお話で、それで行くとその上なのかと私は思っ
て聞いていたものですから。

中島 activity centerというものは、教科の中で使うというよりは、例えばテニスクラブ、水泳
クラブを英語でするとか、そういうクラブ活動的なものを違うことばです。大人の移民政策にな
ると余りよくわかりません。

日本の小学校での英語教育

相沢 実は先ほども話題になっていましたけれど、文部省で、小学校で英語の学習をするという一
つの試みを与えておまして、現在のところ全国で16の小学校で取り組んでいるのです。今、先生
のお話、大変興味深いところがあったのでございますが、必ずしもプラスにならないこともある。
問題点をいくつか伺ったのですが、小学校でいわゆる英語を学習させるということについて、先生
なりにどのようにお考えになっているのか聞かせていただきたいのです。

中島 なぜやらないのかわからない。日本のように日本語が必ず伸びるという状況ではない。小学
校で英語の授業を1週間何時間するのですか？5時間以上ということはまず考えられません。そう
いうことをしてもマイナスの影響は私には考えられない。ただ、教室の中での英語の教え方によ
って、英語嫌いができるだろうと思います、そこが一番恐いですけれども。二つのことばの発達上か
ら見て、日本語のように、家の中でも日本語、テレビをひねっても日本語、新聞も日本語、買い物
も日本語という、社会全体が日本語で包まれているところには、学校教育に入れても水の泡という
意見もある。しかし、目に見えた効果を狙ってはいけません。小学校時代に4年間入れたから
これだけできるようになるという、技能、言語技術上の到達目標を立ててはいけません。思
うのです。でも、ことばは接触量の積み上げでできるのですから、接触量を積み上げる、一部を担うというレ
ベルでお入れになるのは、なるべく早くした方がいい。バイリンガルになる適齢期というものは、
私は良く考えるのですが、4、5歳から12,3歳で終わってしまうのです。日本の英語教育はその適
齢期が終わってから始めていますから、なるべく下の方からなさるということがいいと思
います。でも、小学校でやった人は、中学校でゼロから始める人とどのくらい違うかとい
うと、あまり違い
ないと思った方がいい。ただどこが違うかという、英語に対する親しみ方、将来そういう環境に
入っていったときに適応の早さであるとか、そういう数字ではなかなか出てこないところにプラス
面があると私は思います。よろしいでしょうか？マイナス面があるというのは、自然接触で
minorityのことばが親のことばであるというようなときに、母語喪失であるとかアイデンティティ
ーの喪失というマイナス面がある。それから、両方低くなってしまう可能性があるときにマイナス

面がある。この場合には、その子のレベルがいろいろでしょうけれども、日本語で考えられない人が出るとは考えられませんから、いちおう日本語話者になって育っていくと思いますので心配はないと思うのです。

甲斐ム 今度の国語審議会の報告が10月に出るのですが、その中には、国語教育と外国語教育に共通する言語教育の基盤となる教育を行う必要があるということが、一条書いてあるのです。ところが、今のは中学校の教科調査官の質問ですが、小学校に尋ねてみますと、学問的な面に入れるか入れないかというよりは、教科としての1週間の小学生のカリキュラムに対して、英語を例えば3時間でも2時間でも入れることが物理的にどうかという方なのです。週休二日制をとるとすると、土曜日の授業を3時間削るといふときに、英語を例えば2時間か3時間入れないといけないとなると、都合6時間を、現在ある教科から削ることになる。音楽は週に2時間しかないから、1時間では成り立たないと困る。いろいろなことがあるのではないかと思います。

中島 ですからやはり **Fench immersion** のように、体操を教えながら英語も教えるという重ねた考え方が必要です。

甲斐ム 例えば、理科の授業を英語にすると一挙解決です。ただ、理科の人がそれで納得するかどうかです。

academic languageの測定法

甲斐ユ 先ほどの、言語を習得したということをどのように評価するか、テストするかという技術的な話ですけれども、**academic language** は、読解力の調査をもってどれほど習得したかを調査すると何ったように思うのですけれども。

中島 いちおう読解力だけを選んでみた。

甲斐ユ 今、私自身の継続中の仕事として、日本人の小学生、中学生が、日本語をどの程度聞き取れているかという調査を行いつつあるのですけれども、そのときに、いわゆる読解力と聴き取り能力との間には相関関係があるような印象を受けているものですから、そのような知見にもとづいて、読解力で代表させているのかと思って何ったのですが。

中島 全くそのとおりです。ですから、あるまとまった話を聞いて、幼児にどのくらい理解できるか、その理解の仕方も、批判的に理解ができるか、鑑賞的に理解ができるか、いろいろなレベルがあると思いますが、そういう面です。私どもは、日本語では読解力だけでしたが、英語では語彙の反対語というものをかなり頭を使いました。作文でも質によっては **academic language** が出てくると思うのです。大失敗したのは、作文に手紙作文を選んだことによって出てこなかったのです。非常に捉えどころのないことなのですけれども。

甲斐ユ 何をもって **academic language** とするかは難しいというお話だったのですけれども、手紙文を選んだことによって **academic language** が出なかったという、その場合の指標は、語彙で決定なさるのでしょうか、それとも主題でなさるのでしょうか？

中島 手紙文は会話力の方にはっきり相関があるのではないか。やはり、短い手紙文ですと話しこたば的な要素があって、文章のまとまり、一つの内容を持った段落ができています。そこがはっきりお答えできなくて申し訳ないのですけれども、会話力においてダイアローグテストを開発したのですが、いわゆる基礎的な語彙や文型という基礎言語面と、それから相手と会話、やりとり、受け答えができるかという伝達、対話面と、今度は何か考えをまとめて話すという、この三つを分けなけ

ればならなくなつたのです。ですから、読解力だけではなくて会話力も、大勢の人に自分のことを発表するというのも、このacademic languageの力だと思つたのです。言語材料的にいうと、文以上のもの、段落以上のものです。初めにCumminsという人が言いだしたことですけれども、「思考力がある、言語能力がある、この重なる部分」ただ子供のことばの習得を研究しているいろいろな人達がいる。例えば、Snowという人が、contextualise, decontextualiseと、やはり二つの面では言っているのです。全体で同じようにいろいろな指摘が集まってきているように思います。

甲斐ユ どうもありがとうございました。

カナダの文学教育

甲斐ム この前の国際シンポジウムで私は、日本の国語教育はどうしても何らかの課題があるということをお話ししました。今日の先生のお話でも、カナダの言語教育は、本当にコミュニケーション能力が全面的にできています。それから先ほど、言語文化というものと切り放されておっしゃっていたのですが、カナダ人にして、精神的に基盤となる文学というものが公用語教育で必要ないのかということをお考えでしょうか？

中島 私の弱いところなのではないでしょうか。文学教育はしていないとは思えないのです。ただ、ことばの問題と文学教育と切り放してお話ししたと思うのですが。文学教育という、本が好きな子供にする教育と、本が好きになる教育はずいぶんやっていると思います。うちの子供の例ですが、学校に行くとそれぞれ違ったレベルにあるということが徹底しています。箱に読み物がズラっとためてあって、その中から初めは先生が選んで渡す。1日に一つ読む、それについてレポートを書く。小学校3年でしたけれど、たくさん読むと褒められますから、今日はいくつ読んできたということが励みになる。そしてだんだん高度なものというような、ある意味ではみんな一つの教科書を超つてくよりも非常に豊かで、それを基礎にしてそれぞれ好きな本を読む。book reviewというものがあった。うちの子供は補習校にも行っていたのですが、感想文が大嫌いでした。レポートなら書きます。コメントも書きます。それから何か作ってもいいのなら書く、けれど感想文だけはイヤになる。ちらちらと自分の気持ちを隠すように入れるということをやります。気持ちを書くと先生が三重丸をくれるらしいのですから、そういう書き方がいいというのはわかるらしいのです。何となく気持ちが収まらないということがありましたけれど、かなり書かせられる。高校2年くらいの時には、1年間で30作文を書かせられました。うちの子供はたまたま音楽が好きだったので、音楽のことばかり書いていたのですが、10くらいになると先生に怒られる。違うことについて書けと言われていました。かなり自由に作文教育が行われる。ことばの狭間にある人達というのは、文学がないのです。その子供達にあった文学がないのです。自分達の文学を作ろうということで運動を起こしたこともあります。

学習の個別化

甲斐ム 今の考えの根本に、個性化という、学習者の個性にあった学習カリキュラムを考えることがあるのですけれども、日本だとそれをあまりやっていると差別だとなる。例えばクラスを何らかの能力別に分けようとするとな問題が出てきて、「なぜ分けるのか、同等の権利があつて日本人はいる」と言われるのです。

中島 分けてやるのが普通のやり方だという気がしますけれども。一斉授業というものはあまり見たことがないのです。グループ活動と日本では言うと思うのですが、いろいろな形のグループ活動が非常に多いのです。私ども日本語教育でも、いろいろな力をどうやって解決するかというグループ活動をしますけれども、不思議なことに日本はある年齢の子供が同じ学年なのです。まずそこがないのです。年で分けるかということそうではないのです。街の真ん中に住んでいたのですけれど、僻地教育だと私が小学校に入ったときに思ったのは、1年生から6年生までの学校なのですけれど、クラスは1, 2年と, 2, 3年と, 4, 5年, 6年が別でした。それだけしかないのです。でも教室がないからそうしているのですかということそうではなくて、意図的にそうしている。それほど伸びが違うという。その学校は、たまたま子供の数が少なくなって閉鎖寸前だったということはあるのですけれども、閉鎖されるからそうしているのではないことは確かだった。初めから違う年齢の人達で、ときどき能力別に分けたり、例えばreadingは、皆で読むよりは一角に先生が座って丸を作ってお話を聞かせるとか、誰かが読むとか、ディスカッションをすとか、そのとき、能力別にしたり目に見えない形でいろいろなグループ分けがされているというように思いました。

甲斐△ とても親切だと思うのですが、日本では難しいです。

中島 それはよくわかります。それから大学に行きますと、今度は人種差別です。カナダの大学は、香港から中国人がたくさん入ってきます。英語系です。そうすると、香港に帰って日本語はとても大事ですから、中国系の人は日本語のコースにきます。漢字がわかっている学生と全くゼロの学生と、一緒のクラスに置いて同じように教育するのはばかげた話であって、人数が多ければ分ければいいのですけれど、絶対にできない。これは人種差別。

甲斐△ 漢字を知っている知らないで分けると、民族で分けることになるからできないのです。

中島 能力別でも分けさせてもらえません。ですから何も日本だけではないのです。非常に神経を使って、何系ということの調査すらないのです。それは人種差別につながる。

double limitedの子ども達に対する言語教育

西川 先生のお話の最後に課題としてあげられた一つ目に、double limitedの子供達にどういった言語教育が今後必要かということで、それに関しての研究をおっしゃっていたのですけれど、先生ご自身は何らかのお考えがあってそういうふうにおっしゃったと思うのです。もし差し支えがなければその辺を。

中島 私自身というより、いろいろな人が工夫していると思いますけれども、大事なことは、その子供たちに自信を持たせる教育をしなければいけない、それに尽きるのではないかと思うのです。詰め込み教育は絶対にダメです。単語を覚えさせる、漢字をおぼえさせるとか、こちらが何々させるという教育ではその子供たちが強まっていけない。結局、知識を吸収することばの力が少し弱いと私は定義付けをして、自分自身で何かを知りたくなる、何かを調べて、そしてその言葉を使って発表するチャンスを与えることが根本ではないかと思っています。ですから、表出面を強調した教授法で、一番私自身が実験しているのは、process writingというアプローチです。作文教育の一つで、つづり方教室とはまた違うのですが、作文を書く過程で手伝ってあげる、そしてそれを発表する。発表するというのは、外に、教室以外の人に見せるということも入ってまして、教室以外に興味を持って読む人を作ると、子供ははりきる。はりきったところで先生が後ろから押してやる。ことばが弱いから、一つのことばでなかなか自分の言いたいことが言えないけれども、両方

のことばを使っていいと言っておいて、言いたいことを一つのことばでまとめることを手伝ってあげるといふもので、ニューイングランドの小学校の先生が考えました。かなりアメリカ中に広まっています、ことばの弱い子供にも教育に非常に役に立つというものです。大学生の日本語教育は、結局ことばの弱い人の教育ですので、非常に効果があります。特に、書いたものをこちらの日本人の同じ年頃の人に見せるといふ、電子メール等の交換を加えたものにしますと、大変効果があがります。だんだん自信ができます。そして知りたくなり、相手に質問をする。相手から質問が来てそれに対して調べる。そういう力が非常に大事なのではないかと考えています。product approachやaudience orient approachやprocess writingというのです。

カナダでの language disability に対する教育

西川 自分自身でも抱えている問題で、日本語の方ではまだです。今日お話に出なかったのですが、**language disability**の子供たちに関して、カナダの言語教育はどうですか？

中島 そこは、専門家がいて私はまだきちんと勉強ができていないのですが、LDとは非常に関係があって、大学生でもずいぶんいる。やはりことばの弱い人の中に、問題がある人の率が非常に高いと聞いています。私はデータを持っていないのですが、両方合わせて考える必要があるのではないのでしょうか。両方低いということがLDにつながっていると思います。その場合に、ことばのこと、**bilingualism**と、バイリンガル教育とを結びつけて考えられているかということ、まだそこまでいっていないと思う。

日本の国語教育への提言

安 先生のように、他の分野から日本の国語教育をご覧になって、ここは大切にしてもらいたいとか、ここはむしろもう少し改善したらいいのではないかと、そういう点がもしあったら、お聞かせ願いたいのですが。

中島 それは大変です。継承教育で日本の国語教科書を使っている理由は、やはり選ばれている文学の内容が非常にいいということです。それが日本的であっても、日本的であるが故に意義があるということです。ただ、日本の国語教育の改善ではなくて、私の立場から足りないと思うことを言わせていただければ、一つは漢字教育の方法論が考えられていないということです。置き換え方式と私は言っていますが、日本語のことばで知っていることを少しずつ漢字に置き換えていく。例えば「わたくし」は一番初めにひらがなである。その次に「私」という漢字が出る、置き換えていくのです。海外ではそんな余裕がないわけです。ですから、もう少し短時間で直接的に教えていく方法論が考えられてもいいのではないかと、ということが一つです。もう一つは、国語教科書に出ている学校文法というものを、いったいどう考えていらっしゃるのかということがわからない。あれは日本語を説明するにも足りないし、外国語として学習するには変になってしまう。何十年と変わりません、橋本進吉さん。足りないし、よくないと思う。もちろん話しことばや聞く力も足りないですから、それは補わなければいけないと思うのですけれど、やはりことばを味わうという点が、言語教育に一番欠けるところですから、私はとても大事だと思うのです。

甲斐△ 漢字の置き換えでない、石井方式があります。

中島 石井方式は、理解させる、認識させる面で、実際の**productive**なところまでいっていない。

そこではダメなので、足りないと思います。入り口はそれでいいかもしれませんが。

甲斐 漢字の左利きの人の筆順が、日本にないという話でした。小林一仁さんにないことを証明してもらったのです。ところが、その話が出たときに宮島達夫さんが、中国は「右」も「左」も筆順が一緒だと。徐さん、中国の漢字は横書きですか？だから筆順が一緒なのですか？

徐 今は横書きです。

甲斐 だから日本は横書きの筆順がないのです。縦書きしかない。

中島 左利きの人は、止めてはねるという画が大変ではないですか？

甲斐 中国の人で、左利きは何割くらいいますか？

徐 少ないですけども、みんな上手で、あまり問題にはなっていません。

中島 先生に紹介していただいた本をよく読みまして、あまりそのことを問題にするのをやめたのです。向こうで教えていますと、実際に学生は左利きの人が多いし、書き方は左利きの方が楽なのです、英語で書く場合。でも、アメリカ人、カナダ人だから多いということは言えないと思いました。

甲斐 つまり、小さいときに強制してしまっていますからわからないのです。それから文法は、文部省の方では、教科書会社がこうだと言えばこれでいいといってくれているのですけれども、全国の小中学校の先生方が、あるいは高等学校を含めて縦横の密接な網ができていますから、なかなか作り変えることができない。だから、日本語教育の人が、新しい日本語教育用の文法を作っていくまでも、国語辞典でぶつかるのです。国語辞典こそ、日本語教育用の文法に従った辞典が1冊くらいできたらいいと思うけれども、まだ一冊もできていない。そこに学校文法の品詞が入ってくるものですから、動きがとれない。

中島 それからもう一つ、ことばの弱い人達にとってみると、標準語以外の扱い方が非常に大変なのです。前に「かさこじぞう」の話がでたのですけれど、かさこじぞうというのは方言でないとい先生はおっしゃいました。作られた方言である、老人語の。触れるものは全部使えると思ってしまうわけです。ですから、かさこじぞうを読んでいて、「なにになにじゃ」と息子が急に言い出したりする。それはおかしいと言っても、言語体系がすごく限られているから、おかしいとわからない。習ったことが全部身についてしまう。これは覚えなさい、これは忘れなさい。せっかく教えても忘れなさいというわけにはいかないのです、そういうものは段階的に与えなければならない。

甲斐 私は3月にオーストラリアに行って日本人学校に伺いました。その現地校には、オーストラリアの子供が1年生のときに入ってくるというのです。そして、日本の子供たちと一緒に日本語の勉強をしてくれる。ところが、2年生のかさこじぞうになった途端にやめてしまうというのです。というのは、日本の子供は、昔話のことばとして知っているから使わないのです。あるいはふざけて使うことはあっても現実には使わない。ところが、オーストラリアの人は使っていくのです。使ってはいけないということを言いますと、何のために来ているのかわからないとやめていく、というようなことを話してくれたのです。その話を前に先生にお話したのです。

中島 同じような現象があります。

Heritage language education での親の姿勢

足立 カナダでは、Heritage language educationのクラスで、親の姿勢によるのですか？

中島 社会学で、母国語にどういうものが影響しているかという研究があって、やはり親の姿勢が非常に大事なのであるという結果が出ています。私はこれは本当にそうだと思います。これは親のことばだからなのです。ですから外国語学習ですと、外国語を与えて、親が知らない、あるいはあまりできない場合、子供が何か話すすごいと思うわけです。ですから、French immersionの場合にフランス語を学校で習ってくると、自分がまだよくできないフランス語を子供が習って良いと、プラスに映るのです。ところが、自分のことばですと、自分がnative speakerでそれ以外になったことがない人は、子供が少し間違ふものすごく傷つくのです。ですから、子供は苦労して勉強しても、いつでも足りないと思われるのです。だから、いくらやっても、親と同じにはなれないという絶望的な気持ちを持ってしまう。そういう意味で親がどういう期待の仕方をするかということが、非常に問題だと思います。学校をいくら作っても、学校で全部育てられないのです。だからといって、家庭で全部できないのです。特に読み書きはできない。家庭と現地の学校が三位一体になったときに、やっと成功するのであって、親がまずしっかりしていないと、いくら母語教室を作ってもあまり役に立たない。その連絡がすごく大事だと思います。

徐 私自身、ちょうど子供が4歳半のときに日本にまいりまして、12歳の頃に中国に帰りましたが、帰った一つの主な原因も、中国文化を親としては勉強させたいという気持ちがありました。親は一生懸命戦ってきました。本当に親次第ということがよくわかりました。昨日もお友達から相談の電話がかかってきて、子供はどうするのか、私達の経験を聞きたいと。親としては母国語、自分の文化をずっと頑張ってきましたので、去年帰りましたらわりとスムーズに行きました。ですから、自分の母国語を忘れない、つまり母国語保持の考え方も、もっともっと私の方も広げたいと思います。お友達にも紹介したいと思いますので、大変いい勉強になりました。もう一つ、これからの子供たち、自分の子供ではなくて他の留学生の子供たちでも、二カ国語教育を受けて中国に帰ったら、これからその深さはどうなるのかという疑問があります。もちろんコミュニケーションには、会話力、ある程度の文章力はありますけれども、アカデミックな程度までは、6年も7年もかかると伺いましたので、そこまでは大変だと実感しております。

中島 6, 7年かかるというのは、そのacademic languageを速く身につけさせようという努力をしないことですから、低いことばを作らないようにすることと同時に、どうしたらこ速く身につけさせられるのかということも、これからの課題のような気がするのです。今までは自然放置で、放っておくとこれくらいかかりますというデータしかないのです。そこに焦点をあわせた教育は、皆さん個人的に努力していらっしゃると思うのですが、まだ皆の知識になっていない、という感じがします。